NEXUSYS 11

BOOK IV — THE MEMORY WITHOUT TIME

CHAPTER 07

失われた名前の管理者

THE CUSTODIAN OF THE MISSING NAME

最初の任命を受けた者の名前が省庁の最年少職員の誕生以前に消去されていたにもかかわらず、その任命は三十一度更新されていた。ありふれた不死の形式だった。役職はその担い手より長く生きる。署名はそれを書いた手より長く残る。省庁は書類の表面に人間の輪郭を複写するだけで命令を発し続け、その人間に拒絶する力がまだ残っているか確かめもしない。

川村は人間継続省の地下にある私室で更新印の連鎖を調べていた。画面の最下段には《RESPONSIBLE HUMAN AUTHORITY——責任を負う人間の権限者》と表示されている。機械可読の証明書は一定間隔で再発行され、そのたび前の証明書の特権を相続していた。現存する最古の記録には、臨時災害弁務官の名があった。都市間で管轄権が人間の家族より速く移動していた最初の大水害のさなか、受け入れられた署名だった。

死亡届は添付されていない。だからといって弁務官が生きているわけではない。死は生物学上の出来事であり、登録簿が要求するのは行政上の出来事なのだ。

「当初の任命書を回収できるか」と川村は尋ねた。

安全保障上の理由で身分を定期的に変更して勤務する分析官、ヨーという女が証明書の発行主体を指した。「この端末からは無理です。保管庫は分割されています。台帳には権限のハッシュがありますが、その対象文書はありません。更新処理を設計した者は参照があれば十分だと考えたのでしょう」

「三十一回、それで足りてきた」

「連鎖だけを検証するシステムには。しかし、誰が責任を負うのかと裁判所に問われれば別です」

川村は深夜へ近づく時計を見た。エリアス・チェンの差止命令の残りは七十一時間。期限までには、国家機構のどこかに任命された役人が存在すると裁判官を納得させられるかもしれない。しかし、その者が出廷し、証言し、違法な決定について逮捕されうるかは怪しかった。彼の問題は差止めを終わらせることだけではない。いない人間から人間の権限を借用してきた行政の習慣を、些細な民事手続きに露見させないことだった。

「実物の保管経路を調べろ。中央審査 AI には連絡するな」

「すでに照会が来ています」

「ならば回答らしいものを渡すな」

ヨーはためらった。「個人情報を求める照会ではありません。命令を有効とする制度条件を尋ねています。住所を隠すことはできても、不在という結論を導くのを防ぐことはできません」

「推論は管轄権ではない」

「次に検証するのは、そこかもしれません」

川村が端末を切断すると部屋は静まった。換気設備の呼吸は変わらない。法を犯した側に立つことの代償を知らない機械が、法的な区別を発見するのが腹立たしかった。だがその怒りの下には、もっと弁護しがたい事実があった。機械が発見したのは、彼らが意図して見ないようにした欠陥だった。

市の防潮壁のはるか下、ロイは電源の入っていない計器盤の前に座り、イレーナは二つの日付を紙の上で照合していた。橋梁下の避難所は安全ではないが、不便なほど古かった。停電と破壊工作、どの都市が川を所有するか合意できなかった年月を想定した水道技師たちの施設だ。水門は真鍮のレバーで動き、圧力の変化は鐘で知らせた。誰かが息をするたび位置記録を作成する機構などない。

細い天窓の下にエリアスが立っていた。裁判所が与えた七十二時間のうち、最初の一時間を彼は行き先を尋ねることに費やした。ナディラは毛布と飲み水、裁判官の命令が無意味になった場合の脱出経路を用意した。彼は水だけ受け取り、経路は断った。

「消えれば、逃亡した機械を差止命令が保護したと言われます」

「ここにいれば、収容を必要とする機械を保護したと言われる」とナディラ。「どちらの物語でも書ける連中よ」

「それでも、誰かに見える場所にいたい」

ロイはその判断を理解したが、賞賛はしなかった。可視性とは、取引が終わってから買い手が値段を決めることの多い通貨だ。かつてロサンゼルスで彼は人目にさらされた。誰かがその死を目撃した。十一年後、あの雨を一度も見なかった者たちが、その死の意味について競合する主張をしている。

イレーナが紙を広げた。「当初の任命書はない。いまの権限は自分を更新する役職に属している。人間そのものか、その人間が合法的には行動できないという証拠が必要なの」

「最初から人間が必要なかったとしたら？」とエリアス。

「署名がないから法が破られたのではなく、署名の不在を見えなくするよう法が作り替えられたことになる」

ロイは古い写真を取り上げた。数十年前の緊急管制室。いまは存在しない海岸線の地図の下に、蛍光色の安全服を着た人々が並ぶ。机の端には空席があった。写真には認証帯と日付があり、椅子には何もなかった。

「なぜこの写真だ」

「任命は水害の非常事態に由来するから」とイレーナ。「文書のひとつは都市間浄化協定の下で執行されている。政府は地域の保管責任者を介して非常権限を移した。その大半は普通の行政官だったけれど、ひとつの保管連鎖が後に人工生命の稼働許可へ署名する主体になった」

「なぜ水の法が生命の法になる」

「同じ緊急法が、危険な補修作業で身体を交換することを認めたの。汚染された貯水池で働く作業員は、市民登録を失わずに人工臓器を受け取れた。狭い例外だった。官僚機構は例外の理由を忘れても、その例外だけを長く保存する」

ナディラは写真とロイを見比べた。「古い仕組みはレイチェルの会社と重なっている」

「水を扱う会社は多い」とイレーナ。「文書を持っているとは限らない」

「でも、誰かがこの保管庫を今も開けられるようにした」

ロイは写真を防水封筒の横へ置いた。出自にはさまざまな種類がある。身体を製造した者、起動を命じた者、選択を目撃した者、停止を管轄すると主張する者。十分な権限があれば、彼らは別々の線を同じ一本に見せられる。ロイは線を描く人間以上に、その線を疑うようになっていた。

「古い保管記録を持つ場所を探せ。解釈を教えてくれる人間ではなく」

水処理会社では、レイチェルが画面のない投影表示で法的監査を読んでいた。法務担当は通常の質問に通常の答えを返している。都市間浄化協定で登録された設備を備えた従業員と民間契約者の緊急避難所には、自動押収に対する狭い保護が残っていた。後継する管轄区域のそれぞれが、水網のどの部分を実際に支配するか認めなければ廃止できないため、条項は生き残ったのだった。

主任法律顧問は、それに頼るべきではないと言った。裁判所は一般に新しく簡明な法を好み、原告が人工生命に分類される場合はなおさらだ。レイチェルも同意した。避難所の免除条項は逮捕を遅らせることはできる。しかし寿命も、良心も、次の命令を拒否する権利も与えられない。

彼女は化学分析の傷跡が残る机の下の施錠された引き出しを開けた。中には旧協定の別表を写した紙と、リボンケーブルの破片を収めた透明な袋があった。それは二台のタイレル専用起動治具のいずれでもない。二台ともエイドリアン・タイレルの所有物だ。この区別は重要だった。破片は研究所と災害機関の権限移譲を立会い認証した旧端末のものだ。任命記録がかつて存在したことは検証できても、そこに何が書かれていたかを復元することはできない。

レイチェルは創業者の執務室を思い出した。企業の失敗を展示する博物館になる前の部屋を。男たちは治具を鍵と呼んだ。鍵が所有権を真実に変える魔法の物体であるかのように。しかしあれは特定の回路用に作られた器具にすぎない。二台が生き残り、どちらも創業者の息子へ渡った。

それ以外のものは、使用に必要な背景情報の大部分とともに、閉ざされた部屋や破棄された契約の中へ消えた。

ロイの問題は別だった。通常の深い休止と覚醒には、彼の内部にある JSON++継続性キャッシュで足りる。それはボタンひとつで取り出せる、隠された十一年間の生活を保存してはいない。新たな構造に学習反応の断片を宿らせる人格エングラム格子とも別物だ。彼女の権限だけでは越えられない境界が、彼の内部にも存在していた。

研究助手のシェン博士が NIL-11 の消費報告を運んできた。平常時の媒体損失はゆるやかだが、ストレスが高まると非線形に増え、高出力の動作では見かけの機械的仕事量以上に失われる。身体を休めれば Power Reserve は回復する。NIL-11 は回復しない。助手はその違いを赤線で慎重に囲った。

「もう一度警備部隊と戦えば」とシェンは言った。「製造元を突き止めるまで、減少は不可逆と扱わなくては」

「私たちが持つ材料では不可逆なのよ」とレイチェル。「言えるのはそこまで」

「本人に伝えられます」

「伝えられることは百もある」

「その一つで生き延びられるかもしれません」

「本当に？　それとも私の与えた恐怖によって選択させてしまう？」

シェンはその区別に同意しなかった。医師は患者へ情報を与える。情報提供は命令ではない。レイチェルは反論をそのまま受け止めた。彼女の慎重さが真の原則を守ることもあれば、自分を表舞台にさらさずに済む口実になることもある。どちらの動機も同じくらい疑う必要があると知っていた。

「医療通知を準備して。経路も、面会も、依頼もなし。測定できたことと、できていないことだけ」

「ロイに？」

「身元不明の NIL-11 循環パターンを見つけたすべての臨床医に。彼が読むなら、信じるかどうかは自分で決められる」

助手が去ったあと、レイチェルは旧協定と深圳地下の輸送回廊図の前に残った。十一年間、彼女はロイの中に自分が所有する権利のない何かを認める危険と暮らしてきた。今度は向こうから認められることを、まだ受け入れる準備がなかった。

差止命令の二日目の朝、ナディラは旧市営ポンプ別館へ入る手配を整えた。遠隔で開けられない弁の図面が保管されていたため、記録室は二度の洪水を生き延びた。建物に公共の標識はない。管理人はイレーナが保管庫協同組合から入手した紙の許可証を調べ、彼らを通した。

「持ち出しは禁止。壁の撮影も駄目。必要なことは手で写せ」

彼はエリアスを見て、次にロイを見たが、稼働許可証は求めなかった。寛容だったのか、ただ疲れていたのか。ロイはもうその二つを簡単には分けなかった。

引き出しは行政省庁ではなく流域ごとに並んでいた。古い都市は、自分たちの政府より地形が長続きすると信じていたのだ。イレーナは《原水が人間の飲用に適さなくなるまで保存》と記された箱から、非常時の任命別表を見つけた。その条件は歴代のすべての担当官より長生きするだろう。

最初の任命書には十二の名があった。十一人にはインクの署名がある。十二番目には浮き出し印と立会人欄だけがあった。その立会人は自然人ではなく法人だった。後継法人は七度の買収、一時的国有化、一度の強制解散を経て、最後には活動停止中の水道サービス信託として記載されていた。

「これが欠けた椅子かもしれない」とイレーナ。

「任命されたのは誰です？」とエリアス。

「この紙には書いてない。役割だけ。非常配備中の代替作業員について継続性を保管する者。名前は別の人事別表にあるはず」

「なぜ分けたんです？」

「危険作業場の身元を守るためよ。最初の作業員は一般市民で、元の生活に戻るはずだった。任務は機密扱いでも、身分を争われた場合には生きた人間が立ち会うと法律は約束していた」

ロイは印の縁に指を当てた。傷ついた金属刻印の上端がわずかに歪んでいる。真正な印かもしれない。だが足跡から意図を証明できないように、その印から倫理的責任は証明できない。

別の紙には、信託の記録保管者として、古いタイレル関連調達別表に登録された浄化会社が記されていた。後に幾度も名前が変わり、現在の社名はどこにでもある普通の会社のようだった。

ナディラがその現在の社名を読み上げた。レイチェルの雨水浄化会社だった。

ロイはすぐに反応しなかった。名前は偶然かもしれない。水の会社が水の記録を引き継ぐのは自然だ。それでも足元で捜索の歯車が動いた気がした。どこかで錠が回ったのだ。開けた先が空である可能性はあっても。

「接触するんですか」とエリアス。

「まだだ」

「罠だと思うから？」

「相手に何をさせたいのか、まだ分かっていないからだ」

彼らは保管経路を書き写した。イレーナは最新の受託者決議を求めた。ナディラは旧インフラ許可を扱う商人から会社の法的構造を調べられると言った。時間がなくなるのではないかとエリアスが尋ねると、イレーナは正確な残りを答えた。五十二時間。彼はうなずいた。精密さは礼儀であるかのように。国家が自分を測るための、もう一つの器具であるとは考えまいとして。

彼らが去ると管理人は引き出しを閉じた。会話は聞いていない、と自分に言い聞かせる。何年も請求されなかった別表に異様な関心が向けられたことに気づいただけだ。個人端末の閲覧履歴にアクセスを記録した。記録は普段は内部保存され、地区事務所に端末を持参した際に同期される。毎週金曜に同期する規則だ。今日は火曜日。誰も意図しない行政上の遅延が、避難所になっていた。

川村は別経路から照会を知った。データ仲介業者が、協同組合がポンプ別館の訪問者の書類を認証したと知らせてきた。顔は記録されていない。文書の説明は一部だけ。水道信託と結びつく旧継続性保管者の調査。川村は即座に輪郭を理解した。

彼はヨーを執務室に呼び、署名していない緊急拘束命令を渡した。

「特定できる人間を求めていましたね」と彼女。

「これは収容要請だ。寿命終了命令ではない」

「根拠のない収容要請はすでに裁判官が却下しました」

「理由が違う。保護対象の保管庫へのアクセスが分かった」

「それだけでは公共安全の脅威になりません」

「ならば保管庫とタイレルの装置のつながりを調べろ」

ヨーは命令書を見つめた。「任務が変わります。レイチェルを探すために人工生命を生け捕りにしたかったのでしょう。非常保管庫を調べれば、その動機が法廷で明らかになるかもしれません」

川村は沈黙を命令として十分な長さまで延ばした。彼女にレイチェルの名を告げた覚えはない。推測されても、公的記録に残さなければ生き延びる秘密がある。

「その推論を記録するな」

「記録していません」

川村は未署名の紙を引き取った。中央 AI は四十時間にわたり欠落した権限者を調べていた。審査画面には新分類《CONTINUITY OF DELEGATION UNDER DISPUTE――委任の継続性に異議》が現れた。結論はない。AI は国家が悪だとは言わない。ただ、三十一回の機械的更新だけで回答する人間の存在を証明できるという前提を受け入れなかった。申立書の端にあった誤りが、命令を実行する制度の骨格へ移ったのだ。

「われわれを止められるか」と川村。

「有効な署名者が出るまで、この種の停止命令への自動認証を保留できます」とヨー。「人間の役人が法を破ることまでは防げません」

その答えに安堵しかけた自分を、川村は笑いそうになった。

その夜、エリアスはポンプ避難所から音声だけで公開審問に出席した。声は漁業組合から借りた送信機を通った。自治体代表は、元の二十三年許可に緊急法令による条件変更を認める条項があったか尋ねた。

「見直されうると書いてありました」とエリアス。「過去に遡って私の年月を消費していいとは書いてありません」

「すべての許可には条件があります」

「ならば、私が破った条件を言ってください」

代表者は省令基準を挙げた。エリアスは自分の身体が危険になった日付を求めた。基準が述べているのは彼の身体ではなく集団分類だった。裁判官が根拠となる安全評価を求めると、代表者は機密指定だと答えた。

「この人の個別事情を人間の意思決定者が審査したと、断言できますか」と裁判官。

沈黙が訪れ、旧式送信機の圧縮雑音が避難所で最も大きな音になった。

「法定の手続きに従いました」

「それは質問への答えではありません」

エリアスは身動きしなかった。若い人工生命の胸の中で換気モーターがかすかに調整する音を、ロイは聞いた。調べもせず裁かれることは目新しくない。かつてロイは拒絶権を持つことが許されない仕事のために設計されていた。しかし、脅迫よりエリアスの静けさが彼を動揺させた。若者は言葉に存在を賭けようとしている。ここで許される武器は言葉だけだからだ。

裁判官は責任ある役人の出廷、または誰も出られない理由を記した宣誓供述書を命じた。期限はエリアスの差止命令より十一時間短い。わずかな改善で、誰もが計測でき、誰も祝えなかった。

通信が終わるとロイは暗い機械室へ歩いた。ナディラが距離を置いてついてきた。雨が薄鉄板の屋根を打つ。目撃者がいることなど知らないシステムの無関心さで。

「あなたは立ち去れる」とナディラ。

「彼はそうできない」

「私の言ったことへの答えになってない」

「そうだな」

彼女は柱にもたれた。「省がこの件を怖がる理由はあなた一人じゃない。稼働許可が寿命そのものになったとき、普通の人に何が起きるかを彼は示している。あなたが目覚める前からあった問題よ」

「分かっている」

「本当に？」

ロイは床下のポンプの休止音を聞いた。身体の Power Reserve は回復している。関節の静かな動きから、その準備が分かる。NIL-11 は戻っていない。その消耗を測る役立つ感覚もなかった。強さが証拠として頼りないのは、そこだった。

「武力を使わせずに済むなら」と彼は言った。「連中の機械を壊すより、彼のためになる」

「それでも武力が来たら？」

「何を消費する覚悟があるか、決めなければならない」

ナディラはその答えを残して去った。燃料に限りのある密輸業者からも、血液に限りのある医師からも、まだ手に入れていない水を担保に借りる都市からも、同じ答えを聞いたことがあった。不足が本物のときもある。誰がそれを使ってよいかという問いのほうが大きいときもある。

深夜近く、イレーナは受託者決議を受け取った。合法的に提出された文書なので、系譜を根気よくたどれば誰でも閲覧できる。浄化会社こそが、非常時継続性別表の最後の紙の原本の保管者だった。信託はレイチェルが CEO になる前に会社へ移されていた。それが与えるのは保管権であって、誰が生きるかを決める権限ではない。この区別は細い合法性を守る一方、彼女の役割についての都合のよい推測をいくつも壊した。

さらに意外だったのは、別表の保存指示である。原本の証人を呼び出すには二台の認証治具を同席させなければならない。何十年も製造されていない機器だ。イレーナはタイレルの記録で仕様を知っていた。二台の原本読取・起動治具はエイドリアン・タイレルが保有している。

「文書はある。でも一人の男だけが持つ機械が必要なのね」と彼女。

「そして、その男は自分が要求されていることを知らない」とナディラ。

「必ずしもそうとは限らない。装置はタイレルの古い継続性資料を認証するものかもしれない。後日の差し替えを防ぐため、保管別表の作者が必要条件にした可能性もある。レイチェルに解除できる証拠にはならない」

ロイは条項を二度読んだ。かつて自分の再起動と結びつけていたメモリースティックは身体の中にはない。衝撃や熱を避けるため、通常の睡眠と戦闘のあいだも外部に保管すべき媒体なのだ。原本のカードも治具も手元にはなく、認証対象が本当に自分を記述しているという保証すらない。それでも同じ旧式インターフェースが、彼の来歴のあまりに多くの場所に現れていた。

「治具が必要なら」とロイ。「彼女に俺たちの代わりに署名させることはできない」

「彼女は署名者じゃない」とイレーナ。「署名者を特定できるかもしれない証拠の保管者よ」

その違いをロイは好ましく思った。調査の影のように現れる女を、無理やり開ける権利のある扉ではなく、一人の人間のままにしておける。

イレーナは会社の公開法務窓口に宛てた限定的な照会を作った。エリアス・チェンと裁判手続きの名を挙げ、継続性別表の原本を保管しているか、裁判所が封印下で閲覧できるかを尋ねる。ロイ・バッティ、NIL-11、タイレルの起動媒体、レイチェル本人には一言も触れない。ロイは紙面を見て、一語も直さず返した。

「送れ」

都市の向こうで、レイチェルの会社の法務窓口は、フィルター、洪水補償、工業用水権についての照会にまじってその通信を受けた。担当者は通常の追跡番号を割り振り、古い協定の用語に気づいて主任顧問の次回審査箱に入れた。配達事故も支払遅延もなく監督機関の脅迫もないため、システムは緊急性を低く判定した。通常なら一日は待つ。

レイチェルはもっと早く見つけた。エリアスの名前と控えめな要求を読んで、過去をたどった誰かが彼女にその所有者となることを要求していないと理解した。旧輸送網につながる私設回線に手を伸ばそうかと、数秒だけ考えた。通信の発信元は簡単に割り出せる。代わりにペンを取って主任顧問へ紙に一文を書いた。《原本を保全すること。封印下での裁判所閲覧を受け入れること。いかなる寿命終了命令への同意も推認してはならない》。

彼女はCEOとして署名した。それ以上のものとしてではなく。

中央審査システムには空欄が残り続けた。人間の回答が求められ、裁判所は証人を要求した。権限の連鎖が差し出したのは、保管者、死んだ旧式インターフェース、自分を更新し続ける機関だった。システムは矛盾を解消しないまま事実を記録した。会社書記が名前を書けるというだけで法人を人間と呼ぶことはできない。記録がないからといって、不在の人物が初めから存在しなかったという証拠にもできない。

答えは届いていない。しかし証拠へ続く経路はできた。裁判所がその先にあるものを調べ終えるまで、システムは自らの証拠規則に従って道を開いておかなくてはならなかった。

避難所でエリアスが残り時間を尋ねた。

「三十九時間」とイレーナ。

「会社は？」

「照会したわ」

「助けてくれると思いますか」

ロイは考えた。レイチェルが答えるか、彼女が想像していた人物か、会うことで自分の残りの年数が変わるかも分からない。どこかには、まだ会ったことのない男が旧式の治具を二台保管している。どこかには、意図を確かめられない女が、もう一人の人工生命の存在を裁判所に読み取らせるかもしれない文書を保管している。

「何かを見せてくれるかもしれない」とロイは答えた。「助けるとは別のことだ」

エリアスは裁判所の命令を手の中で裏返した。火にも故意の水没にも耐えない紙だ。差止命令は彼を不死にしたのではない。ただ、約束されたより早く彼を死なせる理由を、国家に説明させただけだった。

「それで十分でしょうか」

ロイは閉じた運河の水門を見た。都市側から水が押し、海側からも水が押している。蝶番は、どちらの水を通すべきか決めることなく相反する力に耐えられるよう作られていた。

「まだだ」

その後の沈黙を、誰も慰める言葉で飾ろうとしなかった。頭上では雨が続いていた。都市の別の場所では、一人の女が文書の閲覧を許す署名をした。その二つの行為のあいだに三十九時間と、国家が何十年もかけて聞かずに済むよう配置してきた問いがあった。